

劔岳とY先生のこと



文・渡辺勝俊(庶務部企画調査課)

Watanabe, Katsutoshi

写真・滝本勇紀(経済学部4年)

Takimoto, Yuki

七月だというのに谷を渡る風は冷たい。黒四ダムから入山したわれわれは、黒部丸山の東壁を望みながら内蔵助平(内蔵助とは佐々木内蔵成政(さっさ・くらのすけ・なりまさ)のクラノスケであり、加賀藩の黒部奥山回りが名付けたものという)に設営し、立山(たてやま)東面で遊んだ後、劔沢のテントサイトに移動した。

劔岳は後立山(うしろたてやま)連邦から眺めると格別である。黒い岩がピラミダルに天空を突き、その左に立山が陣取っている。その山に登ろうというのである。

Y先生は、当時クラブの部長をしていただいております。富山で生まれ育ったY先生は何度も登っておられたのであろうが、ぜひ一度同行したいと申し出られた。若い頃大病を患われたとかで、毎日宇品海岸で泳いで鍛錬をされていたと聞いていたが、さすがに十日間もの山旅は不安だったのか入山前に精密検査を受けられ、「二十歳代の体力と太鼓判を押された」と嬉しそうに話しておられた。

八ツ峰縦走、別山乗越(のっこし)から前劔、と順調に日程をこなし、最後に源次郎尾根から劔岳頂上をめざした。II峰に小さなキレットがあり、そこをアプザイレン(懸垂下降)で越えた。I峰を越えると這松帯、やがて岩峰になり、劔岳頂上(二九九八)に達した。帰路は長次郎雪渓を下った。長い一日であった。

後年Y先生はこの日の経験を、「II峰からアプザイレンで下ったとき、何度も母の命号を唱えました」と語り、死ぬほどの恐ろしい思いとそれ以上に頂上に達した喜びを感じておられたようだった。

劔沢のテントサイトにはたくさんのテントが満艦飾のごとく林立していたが、ひととき目立つみずぼらしいテントが、われわれのテントと京都大学のテントであった。京都大学のテントなどは今にも倒れんばかりで、事実数日後にはテントが倒れてしまったのだが、われわれのテントも似たようなものだった。

ある日、Y先生がテントキーパーとして残ることになった。帰ってみるとハウレンソウのおひたしが用意されていた。たしか野菜は一日にじゃがいも一個とたまねぎ一個のはずだが、と思っていたら、Y先生がこっそりと「あそこにあざみが咲いていたので、新芽のところをおひたしにしました」と話してくださった。なんでも、調理の途中に山小屋の人に見つり、思わず「ハウレンソウ」といったとか。

山での生活の楽しみの一つは、ときに差し入れがあることで、テントの「広島大学」の文字を見て東京教育大学出身の方がウイスキーを差し入れてくださった。もちろん、そのウイスキーは打ち上げの日まで大事にリーダーが管理することになるのだが、ほかに、休憩中の会話から広島弁と察した同行

者からサラミソーセージをいただいたことがあった。聞いてみると広大出身者で二度びつくりさせられたものである。

その夜は星が降るほどの満点の星空であったように記憶している。明日は、立山から下山する者と穂高岳に向けて縦走する者と二手に別れることになっており、簡単な打ち上げをした。テントの中のろうそくが赤く燃えるのを見つめながら、Y先生は、おもしろおかしく今回の山行の思い出を語った。酔うほどに誰からともなく歌も飛び出してきた。

人皆、花に酔う時も／残雪恋し、山に入り／涙を流す山男、雪解の水に春を知る

先輩から歌いつがれた「広島高師の山男」の歌を全員で歌った。二十三年前の話である。

